

那珂川町の文化財 25

安徳地区の遺跡②

～安徳・仲・上梶原・下梶原～

2017

那珂川町教育委員会

はじめに

那珂川町は明治22年4月30日に町村制の施行によって、南畑村、岩戸村、安徳村の3村が誕生し、その後の昭和31年4月1日には市町村合併促進法によって、この3村が合併し現在の那珂川町が発足しました。発足当時は人口が8,948人でしたが、博多南駅線の開通等による利便性の向上や豊かな自然をもとめる人たちの定住により、現在は人口が50,000人を超え、平成30年10月には市制施行をむかえようとしています。

合併前の3村のうち安徳村は現在の安徳・上梶原・下梶原・東隈・仲・五郎丸・今光・松木・中原の9つの地区からなりますが、これまで『那珂川町の文化財21「安徳地区の遺跡①」』で今光・中原・松木の3地区の遺跡を紹介しております。

今回はそれに続いて『那珂川町の文化財25「安徳地区の遺跡②」』と題して、安徳・仲・上梶原・下梶原の4地区で発掘調査された遺跡を紹介します。今回紹介した以外にも東隈の東隈遺跡群や五郎丸の屋敷ノ内遺跡群など紹介しきれていない遺跡や岩戸村や南畑村の地域にも多くの遺跡が存在しており、本町には幾重にも折り重なった歴史と文化が営まれていることが分かります。

この冊子を通して本町の歴史に触れる機会となっていただければ幸いです。

あんだいせきぐん 安徳台遺跡群

那珂川町を代表する弥生時代の遺跡で、福岡平野の最も奥まった所に位置しています。遺跡の広さは約10万㎡で、これまでの発掘調査で、弥生時代、奈良時代、室町時代の遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は、中期から後期初めにかけての集落と中期後半の墓地が見つかります。集落は台地全体に広がり、これまで、130軒をこえる住居が確認されまし



▲上空から見た安徳台遺跡群

台地の広さは裾野まで含めると22万5千㎡で、平野部との比高差は約30mもあり、自然の要害ともいえる地形をしている。

た。なかでも2号住居は弥生時代の中期中ごろでは日本最大級の大きさで、青銅器の鋳型や勾玉など貴重な遺物が出土しています。墓地は甕棺墓で、10基を確認しています。このうち2号甕棺墓からは、たくさんの副葬品が出土し、奴国の有力首長のお墓であることがわかりました。



◀2号住居

中期中ごろ(約2,200年前)の円形の住居。直径が14mを超え、この時期の住居としては日本最大級。住居からは勾玉や青銅器の鋳型、鉄器や鉄片、石剣や石包丁の未製品、また、それらの加工や仕上げに使用されたと考えられる砥石や作業台が出土した。右の写真は遺跡見学会の様子。230人以上の人が取り囲んでも、まだすき間が見られ、住居がいかに大きいかわかる。(写真右) ▶



▲**勾玉**(2号住居出土)
上質な滑石でつくられている。一度壊れたものに穴をあけ直し使用している。(長さ約2.3cm)



▲**青銅器の鋳型**(2号住居出土)
滑石製。やりがんな(のみ)の鋳型。住居に伴って出土した鋳型としては、日本最古級である。(幅4.8cm)



▲**管玉**(18号住居出土)
韓国でしか産出できないアマゾナイト(天河石)でつくられている。この時期の出土例は日本初(長さ約8mm)



▲**銅鏃**(18号住居出土)
青銅製の矢じり。住居から出土は日本初。(残存長約2.3cm)



◀有力首長墓

大きな墓こう(4×5m)のなかに6基の甕棺が埋められていた。(写真左)一番深いところで見つかった2号甕棺(右)と5号甕棺(左)のうち、2号甕棺からは貝輪43個以上、ガラス製の勾玉3個、管玉334個、塞杆状製品2個、鉄戈1本、鉄剣1本が出土した。また、5号甕棺からも塞杆状製品が2個出土した。(写真右)



▲**塞杆状製品・勾玉・管玉**
塞杆状製品(左)は全国で2例目の出土で、髪飾りとして使われた。勾玉(右上)、管玉(右下)はガラス製で、組合せて、首飾りなどにして使われた。



▲**貝輪(腕輪)**
ゴホウラ貝という沖縄など南西諸島の海でしかとれない巻き貝でできている。43個以上も出土したのは日本初。(長さ13~15cm)



▲**鉄剣(左)と鉄戈(右)**
お墓からよく出土しているため生前の権威や地位をあらわすものとして考えられている。鉄剣の柄には糸が巻かれている。(長さ約30cm)

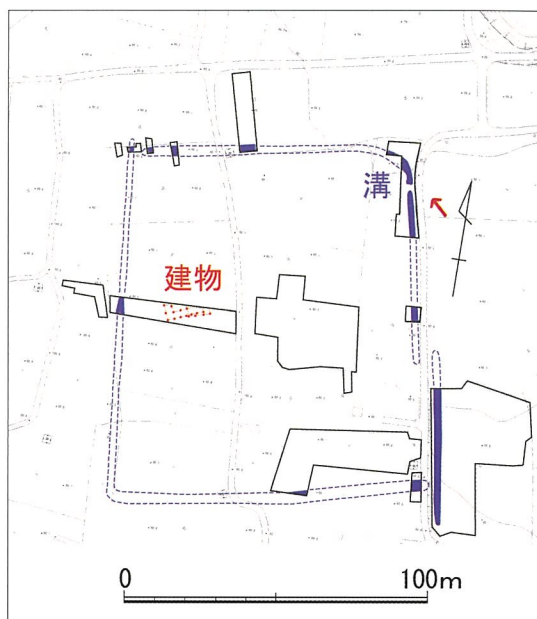


台地の南西部から室町時代の居館が見つかっています。居館^{きょかん}は一边が約110mの方形で、周囲を溝^{りつ}（堀）で囲まれています。溝には、入口と見られる陸橋状に切れた所が数箇所あり、一部には門の跡と考えられる柱を建てた跡も見つかっています。居館内の調査は一部しか行っていませんが、現在3棟の掘立柱建物跡が検出されており、居館東側からは墓地も見つかっています。



▲居館を囲む溝

右図の矢印の方向から撮影。



▲居館想定図

規模は南北110m、東西100m。

安徳原田遺跡群

安徳台遺跡群の眼下に広がる遺跡群で、V字形に広がる平野部の一番奥まった部分に^{いとな}営まれています。調査例が少なく遺跡の内容は良く分かっていませんが、弥生時代から中世にかけて遺跡が見つかっています。このうち弥生時代のものとしては、中期の甕棺墓が1基と後期の溝が1条確認されているだけですが、溝の中からは祭祀に使われた赤く色を塗った筒形器^{つつがたき}台が出土しています。また、本遺跡からは明治27



▲昭和62年度調査区全景

現在のライスセンター建設前に行った発掘調査の様子。調査区上辺のほぼ中央から斜め左下にのびる大溝が発見された。

年に銅矛^{どうぼこ}が12本出土し、調査の結果6本の所在が分かっています。その所在は藤野家、京都大学総合博物館、東京大学、明治大学に各1本、伊都国歴史博物館に2本が所蔵されています。

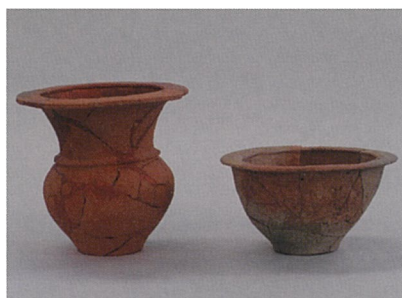


おおもみぞ 大溝

幅約3mの大溝の一番上で、土器がまとまって出土した。出土した土器から、祭祀(まつり)を行った跡と思われる。(写真左)右の写真は筒型器台が出土した様子。(写真右)▶



▲筒型器台(大溝出土)
表面が赤く塗られている。(高さ約60cm)



▲壺(左)と鉢(右)
壺は筒型器台と同じ大溝から出土。
鉢は2号溝から出土。
(右:高さ約22cm)

銅矛(右)▶

明治27年に安徳の原田から出土した12本のうちの1本である。広形銅矛といわれるもので、祭器として使用された。(長さ約90cm)
(藤野家蔵)



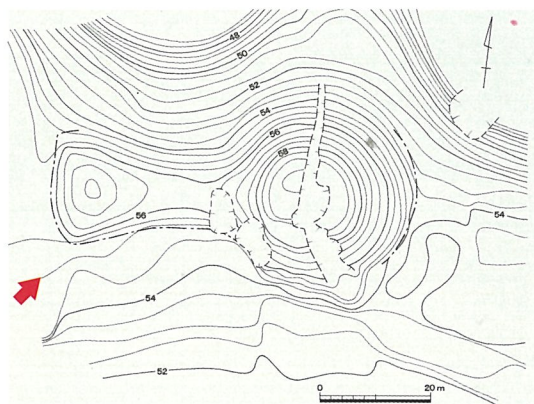
あん とく おお つか こ ふん

安徳大塚古墳(国史跡)

安徳大塚古墳は、那珂川流域の平野部で一番奥の、眺めの良い丘陵上につくられた前方後円墳です。現在は木が生い繁り良くわかりませんが、とても美しい形をしています。全長は64mで、前と後ろに濠をもち、それを含めると81mほどの大きさになります。本格的な発掘調査が行われていないため、詳しいことはわかっていませんが、埋葬施設は礫床粘土槨と思われ、つくられた時期は4世紀の後半ごろと考えられています。「葺石」と「埴輪」が確認されていることから、石を敷き詰めまわりに埴輪をめぐらせた、当時の壮観な姿を想像することができます。



昭和46年撮影、九州歴史資料館提供



▲安徳大塚古墳の全景

古墳の南半分だけ樹木を伐採して、図の矢印の方向から撮影したのですが、その独特の形がよくあらわれています。後円部(写真奥)は高さ約6m、直径約35m、前方部(手前)は高さ約2m、幅約20mあります。

仲遺跡群

仲遺跡群は那珂川右岸の標高約25mの微高地上に広がる、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡群です。このうち遺跡の中心となるのは古墳時代のはじめごろの遺跡で、竪穴住居跡が36棟も見つかっています。井戸や倉庫、集会所と思われる大型の建物跡も見つかり、当時のムラの様子を知る上で大変貴重な発見となりました。



▲仲遺跡群の全景(平成3年度撮影)

ミリカローデン那珂川建設前に行った発掘調査の様子です。

龍頭遺跡群

龍頭遺跡群は標高40～60mの丘陵上に営まれた、弥生時代と奈良・平安時代の複合遺跡です。奈良・平安時代の遺跡としては、3間×3間の総柱の掘立柱建物跡が1棟、深さ約4mの土壇が2基確認されました。これらは丘陵の最も高い地点で見つかっており、これまでに町内で見つかった掘立柱建物跡や土壇とは異なり、規模も大きく、立地も高所が選ばれています。奈良・平安時代において、ここが重要な場所であったことを窺い知る貴重な発見となりました。



▲掘立柱建物跡 一辺の長さは約8mです。

人とくらべるといかに大きいかわかります。

地別当遺跡群

地別当遺跡群は上梶原の丘陵上に広がる遺跡で、奈良時代の須恵器を焼いた窯跡が2基見つかりました。見つかったのは山の急な斜面で、窯をつくった人々が風向きなどを考えて場所を選んだのでしょう。窯はいずれも天井部が崩れてなくなっていますが、トンネルのように地下をくり抜いてつくられていました。窯跡近くでは灰原とよばれる須恵器を焼く際にできた灰などを捨てた場所も見つかっていて、窯内部や灰原から出土した須恵器の坏や壺は年代を知る上で重要な資料となります。また、春日市から大野城市、そして太宰府市にかけて営まれた、九州最大の規模を誇る牛頸古窯跡群との関係が注目されています。



▲奥が出土した土器、手前が置き台

右奥の鉢は高さ約16cm。置き台は窯の中で土器を水平に置くための台として使いました。



▲窯の本体 上半分はなくなっています。壁は熱で赤くなっています。下のほうには置き台が転がり落ちています。

平蔵遺跡群

平蔵遺跡群は現在的那珂川南中学校・梶原運動公園一带に広がる、標高約44mの丘陵上に営まれた、縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。中世の遺跡としては土壇・溝・墓・掘立柱建物跡のほかに鍛冶炉が見つっています。鍛冶炉は全部で7基確認されています。炉の中あるいはその周辺からは鞴の羽口（炉の中に風を送る鞴の先に付ける）、坩堝（鉄を溶かすのに使う容器）や鉄滓などが出土し、鉄滓の化学分析から、ここで鉄の塊から混じり物を取り除き、鉄器を作る作業が行われていたことがわかりました。中世の鍛冶炉はめずらしく、貴重な資料となりました。



▲鍛冶炉から出土した遺物

左が鞴の羽口、右が鉄滓。



▲出土した土器 左奥の土釜は高さ約18cm。

大塚遺跡群

大塚遺跡群は岩門城跡から延びる標高40～60mの丘陵上に営まれています。平成19年度におこなわれた発掘調査により、室町時代を中心とした櫓跡と考えられる基壇状遺構、それを守るための堀や土塁、住居であった建物跡などが見つかりました。近くには、ほぼ同時期にこの一帯を治めていたと思われる武士の居館が見つかった安徳台遺跡群や、鍛冶炉が見つかった平蔵遺跡群があり、それらの遺跡との関係が注目されます。



▲堀と土塁

堀は深さ約2m、土塁は高さ約1.5m。



▲発掘調査後の様子

左から建物群、曲輪群、堀、土塁、主郭部と基壇状遺構。

おわりに

今回紹介した遺跡は、弥生時代から中世にかけて途切れることなく営まれており、発見の多くは那珂川町の歴史を考える上で欠くことのできない貴重なものばかりです。また、現在も残る田園風景は古代の人々の見ていた風景と何ら変わらないものだったことでしょう。

1. 合政遺跡群
2. 前田遺跡群
3. カクチガ浦遺跡群
4. 仲遺跡群
5. 下梶原前遺跡群
6. 地別当遺跡群
7. 安徳原田遺跡群
8. 安徳大塚古墳(国史跡)
9. 平蔵遺跡群
10. 龍頭遺跡群
11. 大塚遺跡群
12. 安徳台遺跡群
13. 東隈遺跡群
14. 宮ノ前遺跡群
15. 屋敷ノ内遺跡群

※赤文字は冊子で紹介した遺跡

那珂川町の文化財 25

安徳地区の遺跡②

—安徳・仲・上梶原・下梶原—
2017年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番1号

印刷：有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号

安徳・仲・上梶原・下梶原の主な遺跡の分布

この図は国土地理院刊行の地形図福岡南部・不入道を使用しました。

